

**今回は、地歴公民科による授業改善実践報告です。**

**◇ 3年日本史Bの授業で、コンパクトな探究活動とプレゼンを行いました！**

**日時：**2018年6月1日(木) 2限(3年7組)、6限(3年5・6組)  
**対象：**3年7組(選択者28名)、3年5・6組合併クラス(選択者50名)  
**担当：**林直樹 **内容：**グループ活動によるテーマ学習(近世史より2題)の実践。  
**教材：**「詳説日本史B改訂版」(山川出版社)、「新詳日本史」(浜島書店)  
**留意点：**同一内容の授業を、3年7組、3年5・6組合併クラスでそれぞれ実施した。

**◇ テーマその1 鈴木春信「五常」をめぐる歴史探究**

既習範囲(「幕政の安定」～「宝暦・天明期の文化」)の中から、テーマに沿った歴史的事項を探り出し、歴史像を再構成する作業を各グループで行った。

テーマは鈴木春信の錦絵(五常「智」)をめぐる問題。本来庶民の娯楽であり、美人画や好色物などの分野に腕を競い合った絵師たちが、なにゆえ儒教道徳をテーマとした作品(教訓絵)を描くにいたったのかについて、教科書や資料集を使いながら探究した。

生徒たちは、春信の活躍した江戸中・後期の政治、学問や文化の動向に着目しつつ、図やグラフ、本文や脚注の記載事項をもとに、グループごとに議論を深めた。女子教育と石門心学の発達、浮世絵とモデルになった女性との関わり、寺子屋の増加と教訓絵の登場の相関関係など、思い思いの視点で闊達な議論が進められた。

各グループによる報告では、教員側の予想を超えた鋭い指摘やユニークな歴史解釈が複数寄せられた。



東京国立博物館蔵



1枚の浮世絵をめぐる探究。教科書・資料集の本文や脚注、図やグラフから歴史的背景を読む。グループ内で意見交流を重ね、浮かび上がった歴史像をグループごとにまとめ口頭で発表する。

## ◇ テーマその2 「文治政策と身分差別」をテーマに口頭プレゼン

既習範囲（「幕藩社会の構造」「幕政の安定」）の中から、文治政策と身分差別の強化について扱った部分を個々人で精読し、差別強化にいたるまでの歴史的展開を再確認した。さらに少人数（4～5名）のグループ内で、一人ひとりが順番にテーマについての口頭プレゼンを行い、たがいに評価し合った。

テーマは、**文治政策の推進と穢れ感の浸透、差別意識の強化**をめぐる問題。文治政策によって殺伐とした気風が抑えられた反面、死や血の穢れを忌み嫌う風潮が強まり、結果的に死牛馬の処理や行刑等の業務に服した人々への差別が強化された。その間のプロセスを史実に即して理解し、様々な歴史用語を適切に用いながら他者に説明することを目標に、グループ内での口頭プレゼンを行った。生徒たちはやや緊張しながらも、順番にプレゼンを行い、用語使用の正確さ等に関し、相互にチェックし合った。



他者の前でプレゼンを行うことを前提に、習得した知識を再整理し、頭の中で歴史の再構成してみる。そしてグループ内で一人ひとりが口頭プレゼンを行い論評し合う。こうした実践の積み重ねは、SGH課題研究や学会発表などの外部での活動にも活かされる。

## ◇ 自己の到達度を知る 歴史理解度と文章表現力を問う論述テスト

今回の授業（50分）の内容に関する自身の到達度を知るための手段として、論述テストを行った。テストは以下の通り、前期中間考査（日本史B）の中に入れて作問し実施した。

問A 江戸期の身分制社会の最下層には、かわた（長吏）・非人と呼ばれる人々がいた。特にかわたは、死牛馬の処理や行刑役などを強いられ、「えた」の蔑称で呼ばれた。彼らに対する差別意識は、17世紀後半より強化されたといわれる。その背景には何があったか。以下の語句を用いながら説明せよ。ただし語句はすべて用いなくてよいし、語句を使う順序も自由でよい。

生類憐みの令 服忌令 殺生 死者 穢れ感（けがれかん） 文治政治  
かぶき者 殺伐とした気風 死 血

問B 下記の作品は、1767（明和4）年の錦絵。儒教の教える五つの道（五常、仁義礼智信）

を描くシリーズの一枚。文机に向かって手習いをする少女と、指導する女性を描く。教訓絵と呼ばれるジャンルであり、女性の一生に起こり得る様々な場面を想定して、その時の心構えや教訓として何かを教えるための浮世絵を指す。浮世絵とはもともと庶民の娯楽であり、絵師たちも美人画や好色物などの分野を得意とし腕を競い合った。にも関わらず、このような教訓絵が描かれた背景にはどのような事情があったか。下記の用語を必ず用いて説明せよ。なお、用語には必ず下線を引くこと。



封建道徳 生活倫理 儒学 心学 寺子屋

◇ テストの解答例 ～高大接続改革に向けて～

設問 殺伐とした風を嫌った五代将軍、徳川綱吉は、生類憐みの令で服忌令を発令した。これにより、殺生や死、血を穢れたものとして嫌う、仏教や神道に基づいた風潮が助長されたため、死牛馬の処理や行刑役などを行うかたは、穢れているとして、い、そう差別されるようになった。

設問 6.  
五代将軍徳川綱吉は文治政治を志向したが、軍人や華族の殺伐とした風を嫌った「ひらき者」の増加が課題であったため、幼少な風潮をなくするために、忌引を規定し、服忌令や極端な重労働保護法による生類憐みの令を発布して殺生や死の穢れ感を嫌う風潮が助長するのをひらき者の減少につなげたが、殺生や、死、血に關した仕事を(行)かたは、差別意識にもつながって[2] した。

設問 寺子屋が増加し、生活倫理に基づいた心学や封建道徳を軸とする儒学を学んだ人々からの一定の需要があるに加え、儒教を信仰する幕府の意向に沿うような浮世絵を描くことで、美人画や好色物などの分野を描いても幕府から統制されにくくなるようになった。これに教訓絵が描かれた。

設問 生活倫理を描いたこのような浮世絵は庶民にとって身近で、心算などに親しみやすく、新・儒学を奨励している幕府にとってもおもしろがることは喜ばしいことである。③ 加えて、女性テーマのこの浮世絵は寺子屋において女性にも学習ができる④ 点で、より役割も担い、女性が封建道徳を学ばざるがかりにもなってきた。

今回は生徒の取り組み姿勢も良好であり正答率も高かった(両設問とも6満点中平均4点程度)。模範的な解答以外にも独自の視点で分析を試みた解答例なども見られたこと、読み手の側に伝わりやすい文章表現で書かれた事例が多かったことなどは、事前学習の成果がテストの結果に反映した可能性が高い。

地歴公民科、とりわけ「日本史B」「世界史B」において修得が要求される基礎知識は膨大な数にのぼる。そうした知識は生徒一人ひとりの歴史理解や歴史解釈に活かされてこそようやく意味をなす。今回のような既習範囲をもとにしたコンパクトな「探究活動」「口頭プレゼン」の実践は、授業の活性化につながると同時に、高大接続改革の流れとも一致すると考える。

近年、地歴公民科目においても、高大接続改革の趣旨に沿った出題が多く見られるようになった。入試問題は大学が高校に投げかけるメッセージでもある。今後も良質な大学入試問題を範としつつ、教室での日々の授業と高大接続改革をつなぐ活動を充実させたい。